

「障害者週間」記念特集

知る ことから

平成28年4月、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）」が施行されました。この法律は、障がいがある人もない人も、その人らしさを認め合いながら、共に生きる社会をつくることをめざしています。

そんな中、昨年7月、知的障がい者支援施設「津久井やまゆり園」で痛ましい事件が起こり、19人の尊い命が奪われました。社会に衝撃を与えたこの事件の背景を簡単に語ること

はできませんが、その一つに障がい者に対する偏見や差別が考えられるのではないのでしょうか。

今年9月に実施した「障がい者計画に係る市民アンケート調査」で、障がい者福祉への関心の有無をたずねたところ、身近に障がい者がいる場合は、72%の人が「関心がある」「まあまあ関心がある」と答えました。一方で、身近に障がい者がいない場合は、39%にとどまりました。また、関心はあるけど「どのように接していいのかわからない」「どこまで手助けしていいのかわからない」などの声も多く聞かれます。

偏見や差別を無くすことや、関わりを持つことへの壁を取り払うためには、制度や実態の紹介だけでなく、「同じ地域で暮らす人として知る」とが第一歩だと考えます。

市内には障がいを抱えながらも、家族や地域に見守られ、元気に活躍している人がたくさんいます。今回の特集では、「障がい者への理解」「共生社会の実現」という趣旨に賛同いただいた3人に、ご協力いただきました。3人にはそれぞれ違う背景がありますが、自分の夢に向かって暮らしています。今回の記事が「知る」ことのひとつの機会になれば幸いです。

「小郡が大好き。小郡の役に立ちたい」とうれしそうに話す結さん。大学生のときに5か月間の海外留学をしました。その経験とともに、今の思いを伺いました。

結さんは、脳性まひにより、生まれつき歩くことができませんが、家族の支援を受け、幼少のころから、地域の祭りやボランティアなどに積極的に参加してきました。小学生のとき、父親の仕事の都合で、千葉県から小郡に移り住み、ここで大きなきっかけとなる、英語に出会います。中学・高校と、英語の成績が、特別良いわけではありましたが、結さんの中で、英語は確実な強みとなっていく、いつか留学したいと考えるようになりました。また「海外のバリアフリーは進んでいる」という話を聞き、さらに海外への思いを高ぶらせました。

大学2年生のとき、語学研修でニュージーランドに2週間滞在しました。帰国後、㈱ダスキン「障害者リーダー育成海外研修派遣事業」を知りました。これは、海外へ研修派遣を行う事業で、地域貢献を願う障がいのある若者を対象に行われています。選考試験を2回目で突破し、アメリカ・ボストンでの5か月間の研修の機会を得ました。

ひとりの人間として

結さん自身、長い期間、親元を離れるのは初めての経験でした。研修では、自分と向き合う授業があり、自分をどう見てほしいのか、自分をかわいそうと思うかなどを話し合いました。その中で、今まで両親にしたらもらっていたことでも、自分でできることがあると認識しました。

結さんは、現地での生活を次のように話します。「古い街並みを大事にするボストンは、レンガの歩道が多く、また、エレベーターが故障していたり、交通機関が遅れたりするのは当たり前でした。特に驚いたのはヘルパーです。仕事中に私用の長電話をしたり、家族の都合で仕事をすっぽかしたり、日本ならありえないと思うことが多々ありました。それでも居心地がよいと感じました。

なぜなら、道行く人が私のことを凝視することはなく、段差があれば『持ち上げれば楽勝だろ?』と手を貸してくれたからです。関わり方が、他人事ではなくフレンドリーでした。『かわいそう』ではなく、ひとりの人間としてみてくれたことで、社会に関わることができていると強く感じる瞬間が多々ありました。この経験が、私をたくましく、「自立」へと導いてくれました」

大好きな小郡に恩返し

帰国後、結さんは、買い物などへ一人で出かけることができるようになりました。以前は、周りが「できない」と言えばあきらめていたことが、ボストンでの経験が考えを大きく変えてくれたのです。障がいがあるからあきらめるのではなく、どうしたらできるか考えるようになりました。

結さんは、今年6月に就職。事務の仕事をする傍ら、小・中学生の放課後の学習ボランティアや、ボストンでの経験を、講演などをおして伝える活動に取り組んでいます。結さんは照れながら話します。「役に立っているかわからないけど、小郡に恩返しをしたい。ボストンもいいけど、やっぱり小郡が大好きです」



▲ホームステイ先の家族との一枚

小郡が好きだから

東川 結さん(23歳)



▲学校の授業の様子

保育所の友達と共に小学校へ

地域の中でさらに広がる世界

両親は、地域の小学校と特別支援学校を見学し、長所・短所をしっかりと整理した上で、地域の小学校への入学を決めました。その理由は、保育所の友達がしんのすけ君に対して「二人の仲間」として関わってくれていたことです。

小学校では、特別支援学級に在籍。両親は入学時、小学校の友達や、放課後に利用する学童保育所の友達に、しんのすけ君のことを理解してもらうため、しんのすけ君の性格や関わり方を紹介した紙芝居を作り、聞いてもらいました。

その後、しんのすけ君のことを知ってくれる友達は増え、交流学級の友達や、学年の違う友達とも楽しく過ごすことができました。中学生になった今でも、声をかけてくれる友達がたくさんいます。

◀両親が作った
紙芝居 ▶ライクポット小郡での
スケジュール管理の様子



両親は、しんのすけ君が家庭以外で過ごせる場所を増やすことで、家族以外の人と関わることを目標に、放課後等デイサービスや、市のタイムケア事業などを利用しました。

ライクポット小郡（放課後等デイサービス事業所）では、「次の課題」をスケジュールで確認しながら過ごせるようになり、たくさんのお社会経験を積んでいます。スタッフの山下さんは「3年前の利用開始当初は、気持ちが悪く落ち着かないこともあったけど、今ではリーダーシップを発揮し、年下の友達のお世話をするなど、頼れるお兄さんです」と話します。

また、タイムケアでは、多くのボランティアから愛情をいっぱいにかけて過ごしています。しんのすけ君と出会って5年になる秋山さんは「最初は自己主張の強い子だと思っていたけど、あるがまま受け入れようという思いで接しました。すると、次第に落ち着き、心を開いてくれて、今ではたくさん遊んでくれます。しんのすけ君と関わるのが、いつしか私の心の安らぎになっていました」とうれしそうに話してくれました。

愛情をいっぱいを受けて

しんのすけ君(13歳)

将来の自立に向けて

しんのすけ君は友達と関わるのが大好きでしたが、小学校高学年になるにつれて会話が一方的だったり、相手の気持ちや状況をくみ取ることが難しかったりすることがありました。また、周りが気になって物事に集中できないことがあり、両親は、地域の中学校と特別支援学校のどちらに進むべきか、とても悩みました。十分に検討し、特別支援学校を選択しました。将来の「自立」に向けて必要な力を身に付けることや、人との関わり方について、ゆっくり時間をかけて学び、将来の仕事や人間関係が少しでもスムーズになることを願うての選択でした。

学校の担任の志岐先生は「入学当初は、環境の変化に戸惑っていました。が、徐々に慣れ、落ち着いてきました。今では、たくさんのお友達と楽しく過ごしています。作業学習などにも集中して取り組むことができるようになりました。将来の「自立」に向けて、今後もサポートしていきます」と話しています。

出会ったみんなが「応援団」

ウルトラマンをこよなく愛し、笑顔が素敵なしんのすけ君は、小郡特別支援学校中学校に通っています。しんのすけ君には、両親をはじめ、多くの「応援団」がいます。そんな皆さんと、しんのすけ君との関わりをご紹介します。

地域へ初めての仲間入り

しんのすけ君は、生後まもなくダウン症候群の診断を受けました。1歳前から、運動発達を促すためのリハビリテーションと、遊びを通じた母子保育の中で療育をスタート。その後、母親の仕事復帰をきっかけに保育所に通うことになりました。

両親は、いくつかの保育所に相談し、将来の小学校生活も見据えて、自宅近くの保育所に通わせることを決めました。「在園中、先生にたくさん話を聞いていただいて、本当に心強かったです。しんのすけが初めて歩いたのは保育所でした。先生からその一步の写真が届いた時、本当にうれしかったです」と当時の思い出を話します。充実した保育所時代を経て、小学校への入学時期を迎えます。

両親の思い

「私たち両親は、しんのすけの『人生の道案内』をするのが役目だと思っています。どのような力を身に付けるかは本人次第ですが、できるだけ本人の「良さ」を伸ばしていきたいです。そして「将来の自立」に少しでも近づけるように、経験を積み重ねて、自分一人であることを増やしてあげたいと思います。

現在利用している福祉サービスなどは、高校卒業とともに終了します。でも、これまで出会った人とのつながりは、途切れることなく、将来の生活の中に何らかの形で続いてほしいです。どんな形であれ、しんのすけの良さを、障がいの特性を生かした社会参加ができることを願います。また、仕事や余暇、趣味の場など、社会参加の選択肢が地域に多くあることを願っています。――

- ※ 1 交流学級…特別支援学級に在籍しながら、一部の教科やホームルームの時間を同級生と過ごす学級
- ※ 2 放課後等デイサービス事業…学齢児に対する放課後や長期休暇の療育の場であるとともに、放課後等の居場所づくり
- ※ 3 タイムケア事業…障がいを持つ児童の放課後の居場所づくり



※1 就労継続支援B型事業…障がいにより一般就労することが困難な人を対象に、雇用契約を結ばずに、障がいの状態や体調に合わせながら、一般就労に向けて、就労の提供や必要な技術・知識を提供する事業。生産から得た収入は、諸経費を差し引いた額を工賃として利用者に配分しています。

病院での出来事から1年、母親が他界しました。「自分が障がい者だなんて信じられない」と考えた時もあり、障害者基礎年金を受給しながら、市内の事業所を紹介してもらいましたが、なかなか気持ちに前に向きませんでした。

そんな中、唯一農業に取り組んでいた就労継続支援B型事業所「ろーど」に出会いました。腰痛持ちの自分ができることがあるか、仲間とうまくやっていけるかと不安はありましたが、スタッフから体験を勧められ「やってみようかな」と気持ちが動きました。

決め手は農業
過去の経験が生きた



働く喜びと生活の質
ゼロではない、プラスの力

いくつかの工程の中から、茂信さんができるものをスタッフと一緒に探しました。「これならできるごたあ」と最初に手がけたのは内職作業。野菜の種植えや除草作業などを行い、それが自信につながりました。もともと週3日の予定でしたが、「仕事もみんなといることも楽しかあ」とほとんど休まず毎日通い、周囲の会話が気になると「どーした？」と首を突っ込むほど、心配りするようになりました。地域の行事や同窓会にも積極的に参加するようになりました。

昨年、父親が他界しましたが、母親の時のように興奮状態になることはありませんでした。生活は厳しくなりましたが、お金の管理は、親戚などの協力を得ながら、自己管理を希望。うまくいかないこともありましたが、関係機関が集まり、方針を話し合っています。

厳しい家計のため、買い物などに利用していたタクシーを、サポネットおごりの移送サービス(障がい者に対して行う安価な福祉移送サービス)に変えました。毎日購入していた弁当も、週3日、小郡市社会福祉協議会の家事援助(掃除・調理)を

やっぱ小郡がよかあ

“一般就労”をめざして地域で暮らす

深山 茂信さん(55歳)

利用するようになりました。また、持病による通院結果の報告を受けながら、健康意識も徐々に高くなり、大好きな甘いお菓子の購入も減ってきているのでは、とスタッフは話します。

明日へ向かって
欲しいものを買いたい

今、茂信さんは「生産・製造の仕事がしたい」と一般就労を目標にしています。その理由は「給料」で好きなものを買いたいからです。緻密さが求められる作業は苦手ですが、慣れた作業であれば、長い時間継続して行うことができます。腰痛と付き合いながら、内職作業・野菜の袋詰めなどを中心に、作業技術を深め、一般就労に向けて取り組んでいます。

ろーどのスタッフは、次のように話します。「働く力を持つ障がいを抱えている人が、地域の中でどのような就労をめざしていけるのか、どのように力を伸ばすことができるのかと、実践の中で知っていくことが多いです。今後も、皆さんが活躍できるような場としてサポートしていきたいです」



結びに

茂信さんが、自身に知的障がいがあると知ったのは、今から5年前。両親が入院した時の出来事がきっかけでした。

茂信さんは高校卒業後、久留米の鉄工所に勤務しましたが、足に大けがを負い、約2年で退職しました。実家の農業を手伝いながら仕事を探しましたが、腰痛持ちということもあり、なかなか定着する仕事は見つかりませんでした。

両親が病気がちになり入院すると、一人で生活しながら毎日病院に通い続けました。しかし、一人の生活は安定したものではなく、もともと優しい性格の茂信さんでしたが、気性が急変し、粗ぶうな一面があらわになるようになりました。ある日、病院から、母の容体が思わしくないとこの連絡を受けると「連れて帰る」と怒鳴り散らしました。

相談を受けたサポネットおごり(小郡市障害者生活支援センター)が茂信さんに面会しました。支払いの滞りなど、生活の実態が分かった、金銭管理などの計算や、コミュニケーション力に困難さが認められ、医療機関で知的障がいがあると診断されました。茂信さんは、生活に必要な相談やサービスなど、サポネットおごりを利用することになりました。

市では、障がいがある人もない人も、住み慣れた地域で自立し、活動できる地域社会づくりに取り組んでいます。誰もが安心して暮らせる共生社会の実現には、市民一人ひとりが「ノーマライゼーション」の理念を理解することが不可欠です。

しかし、まだまだ健常者視点の一方的な考え方やルールなどが多く見られます。それらを解消するには、地道な啓発活動が続けることが大切です。その取組として、小郡市自立支援協議会が主催する講演会やイベントで、人材育成やノーマライゼーションへの理解促進を図っています。

小郡市には人や企業、自然環境など、すばらしい地域資源があります。これからも市民、行政機関、関係団体が顔の見える関係を築きながら、地域ぐるみで支えあう共生社会を目指していきます。

※2 ノーマライゼーション…障がい者が他の市民と同様の普通の生活・権利などが保障されるような環境整備を目指す理念

※3 小郡市自立支援協議会…関係機関や関係団体、障がい者などの福祉・医療・教育・雇用に関連する職務に従事する人が相互に緊密な連携を図ることにより、地域の実情に応じた障がい者への支援体制を整備することを目的として設置する機関